タイトル「熊を獲るまで帰りません」
元作品:なし
著者:柿ノ木コジロー
あらすじ:家事を何もしない夫に、ある日、妻・佳乃は書置きを残して家を出る。
「熊を獲るまで帰りません」と。マタギに憧れていたという妻に、夫の公男は唖然とするばかりだったが、妻の友人が訪れて手渡したものに、更に途方に暮れる。
特記事項:特になし
文字数:4944
以下本文

　夕ご飯をご馳走になった後だった、お皿を下げようと立ち上がった佳乃を、エミの夫が自然な感じで押しとどめた。
「洗い物やるから、そのまま置いといて」その後笑顔でこう続ける。
「エミともうちょっと話してやってよ、今コーヒー淹れる」
　佳乃は目を丸くして思わず「すごいね」と言うと、エミが小さなため息をついた。
「家事の取り合いなのよ……アイツ、早期退職してまだやる事決まってないし……たいがい先に洗われちゃうんだ」

　帰って来て玄関のドアを開けて、佳乃はただいま、と小さな声で言ってからリビングに入り、もう一度ただいま、と言う。ソファに寝転んでサッカーの試合を見ている夫の公男は、ああ、と応えたきりだった。佳乃は敢えて聞いてみる。
「お夕飯は？」
　上の空の彼は「食った」それだけだ。
　佳乃は、まずキッチンに向かった。流しに積まれたままの保存容器と小皿とお箸、飲み物によって取り替えただろうコップのいくつかを眺めて、深くため息をつく。べとりと油のついたまま、そして公男が苦手とするグリンピースがゴロゴロと残ったままの保存容器の中に半分ほど水が入り、その中にビールを飲んだらしいグラスが横倒しになって、白い脂が点々とこびりついてしまっている。
　佳乃が出かけるという時には、必ず夕飯を一式、用意しておかねばならない。しかも、ちゃんとレンジで解凍するだけに作っていた惣菜をこんな形で食い散らかして「美味しかったよ」のひと言もないのが常だった。
　今日の礼と帰宅した旨をエミに連絡すると、すぐに既読がついてエミから返事が来た。
――ごめん、つまらないグチこぼしちゃって
――グチ？　何が？
――ダンナのこと。やってくれるだけありがたいのに

――うちなんて、用意したご飯食べ散らかして食器洗いもせずに寝転んでテレビ見てるよ
――でもよっちゃんのダンナ、仕事してるじゃん？
――仕事だけ。家のことなんにもしない
――お料理とかは？
――ぜんぜん。掃除も洗濯も！
――でも
　少し間が開く。エミが軽くため息をついたのが聴こえた気がした。
――でもやっぱり外で稼いできてくれるのはありがたいよ
「……私だって、少しは働いてんのに」声にはこう出したが、しばらく考えて佳乃は、
――かもね
　ひと言で済ませ、その後はもう会話を打ち切ろうと、おやすみのスタンプを送った。すぐに相手からもおやすみなさい、とスタンプが届き、スマートホンは静かになった。
　しばらく暗い画面を眺めてから、投げ出すようにそれをテーブルに置いて、傍らのエプロンを取り上げた。着替えるのは後、とにかく、片づけを先にしよう、とシンクに向き合った時
「なんだよ！」
　急な大声にびくっとなって佳乃は持ち上げたグラスから手を滑らせた。
　ひいきのチームが失点したらしい。しかし、滑り落ちたグラスは運悪く皿の縁に当たり、鋭い音とともに粉々になった。
「どうしたんだ」公男がソファから立ち上がった。テレビも気にしつつ、こちらを見ている。
「コップが、滑って、油で」
「気をつけろよ。なんでそんな……」
　何か言ってやろう、とふとカウンター越しに目をやって、公男がすでにテレビの方を見ているのに気づいて、佳乃は口をつぐんだ。
「あーあ、中村何やってんだよお、交代だ交代」
　左手親指の外側に、ひとすじ血が滲んでいる。手をよく洗い、佳乃は大きくため息をついてから救急箱を置いてある棚に向かった。

　週明けの、ある日のこと。
「今日、パートの後でちょっと出かけてくるから、お夕飯はひとりで」
　言いかけた佳乃を公男が遮った。
「どこに」
「病院」
「びょういん？？」
「……友だちのお見舞い」
「夕方まで見舞いなんて、行ってもいいのかよ」

「７時までは大丈夫だって、作り置きが終わっちゃったから今夜はごめん、冷凍のパスタがあるからどれでも好きなの食べて」
「えええ」公男は子どものように顔をしかめる。
「作るの苦手なんだよな」
「裏に書いてある通りに温めればいいんだよ、８００で６分。スープは戸棚にインスタントのがいくつもあるから」
「インスタントお？　湯を沸かさなきゃだろ？　仕事から帰ってからそんな色々と」
　公男はネクタイを結びながらもなお、口の中でぶつくさつぶやいている。急に顔を上げて「何時頃帰るんだ？」鋭くそう尋ねた。佳乃はびくりとして、目を彷徨わせる。
「お見舞いの最中に……診察があったら少し遅くなるかも」
「診察？　夕方なのに？」
「あるみたいよ」
「診察あるならそこで帰ってくればいいじゃん？　あかの他人だろ？」
「友だちだよ、だいじな」
「いつ時代の？」
　急に投げやりな口調で佳乃が答える。「石器時代、はい、もう時間だよ、早く！」
「なんだよそれ、石器時代って何だよ、おかしいだろそれ」
　振り返り振りかえり、それでも時計が目に入ったのか、いけね！　とあわてて外に飛び出して行った。
　彼が完全に通りの向こうに消えるのを確かめて、佳乃は肩の力を抜いた。それから、急に思い出してあわてて自分のバッグの中身を確認する。財布、診察券、それに……
　かかりつけ医から先日渡されていた、紹介状。

　佳乃からの着信に、エミは大急ぎで画面をタップした。
「どうしたの？　久しぶりだね？」
「エミ、この前はごちそうさま」佳乃の声は明るい。
「この前……ってもう半年以上も前だよお」
「そんなに経った？」
「ラインも既読つかなかったし、心配したんだよ、元気？」
「ああごめんドタバタしてて……あのね」佳乃は電話の向こうでくすくす笑っている。それから急に声をひそめて言った。
「お願いがあるんだけど、いい？」
「えっ？　お願い？」エミは目線を上げる。「できるか分かんないけど。それにしても声遠いね」
「実はね、家出した」

「えっ？」エミは息をのんで続ける。「離婚？　別居？」
「ちがうちがう」佳乃は笑っている。「家出して３日目、だけどまだ帰れなくて」
「どうしてよ」
「事情を話すから、来てほしいところがあるんだ、お願いはそれから、聞けなかったらそれでもいいし」
「どこに来いって？　遠いところは無理だよ」
　佳乃が告げた場所を少し吟味して、エミは静かに答えた。「わかった、すぐ行く」

　エミが佳乃の元に着いて話を聞いた、その晩のこと。
　エミは佳乃の自宅前に立っていた。呼び鈴を押すと、しばらく経ってからようやく、ドアが開いた。
　目の前の男のやつれ様に、エミは「あ」思わずことばを飲み込んで、動揺を見せないようにあわててお辞儀をした。
「どちらさん」低い声の中に、エミをどこかで見たぞ、という響きが滲んでいた。
「あの、アナタ、」
「佳乃さんの高校時代の友人で、結婚式にもお呼び頂いた、恒本です」
「ツネモト……」急に顔がぱっと晴れる。「ツネモト・エミちゃん？」
「はい！　高校の文化祭でお化け屋敷やって、大道具のよっちゃんが作った井戸におしりがハマって出られなくなった、エミです」
「聞いたよ聞いた、それ、わざと寸法ギリギリにしたって」
「ねえ」ついエミも笑い出す。「いっつも何か企んでて、あの子」
「エミちゃんお菊さんだったのにおしりが〜ってずっと悲鳴上げててそれがメッチャ怖がられたんだろ、そんで」笑顔もつかの間、公男は、急に表情を硬くする。
「今、女房は出かけてるんだけど何か」
「出ていかれたんですよね？」
　ナゼソレヲ？　と顔にでかでかと書かれた公男に、エミは畳みかける。
「置手紙をしたと。うちにも今日、手紙が届きました。それと小包」
　エミが渡した手紙を、公男は食い入るようにして読んでいた。「……ほとんど同じだ」
　エミも予め読んでいたので、内容は暗記していた。
『昔からずっと憧れていた、マタギになるべく、２、３週間の予定で山に籠ります。青森の山奥にあるマタギの学校で、くくり罠、猟銃、その他マタギの暮らしを学び、ひとりで熊を獲れるまでは帰りません。探さないでください』
「なんで……なんで」公男は半分涙声になっている。「電話も通じないし、手紙ひとつだけなんて、今まで全然、そんなこと聞いてなかったのに……マタギなんて、狩りがしたいなんて、なぜ急に」
「そう言えば、今日来たのはこれが」エミはできるだけ声を抑え、片手でようやくもてるほ

どの小包を手渡す。
「これが？」
「はい、冷凍品だったので、うちに届いて。ご主人お仕事で日中お留守が多いと聞いていたので多分私のところに」
「これは……」公男はもどかしい手つきで封を開ける。
「鹿肉、らしいですね。では」エミはひきつった笑みを口の端に浮かべ、では、と頭を下げ、きびすを返す。
「待って、エミちゃ、いや恒本さん」エミが振り返ると、公男は震える声で追いすがった。
「何かさ……俺より何か知ってることあったら教えてくれないか？　頼む、この肉は何だ？　どうしろと？　佳乃は帰って来るんだろうな？　えっ？」
「あのですね」エミは、聞こえよがしにため息をついて、公男に告げた。
「私も、手紙以上のことはちょっと。手紙もいきなりだったんです。それに冷凍品なので早く届けなくちゃ、って住所録引っぱり出してここの場所調べて、お持ちしたんですよ」
「あ……すまん」しかし、と顔を上げる。「こいつ、いったいどうすれば？」
「料理すればいいんじゃ、ないですか？」では、と今度こそ振り向かず、エミは駅の方に向かって速足で去っていった。

　三週間後。
　ひっそりと静まり返った家のドアを、そっと開けて佳乃は小さな声でただいま、と言った。
　暗い画面に向いてソファに腰かけていた公男は、ぴょん、と飛び上がり玄関先に駆け寄る。
「お、おかえり、佳乃……オマエ」
「ごめんね、急にいなくなって」
「……」公男の顔は赤くなって、白くなって、それからまた赤みが戻り、目を吊り上げて何か怒鳴りつけようと口を開いた、しかし、優しく微笑む佳乃の顔に目を戻し、下を向いて、やっとこう言った。
「少し、痩せた？」
「かもね」キッチンの方に目をやってから歩いていく佳乃に、公男はまるで子犬のようについて行く。
「ご飯はどうしてたの？」
「……スマホでみて、色々作れるようになった。それよかどうして」
「どうして、なに？」
「どうしてマタギなんて？」
「憧れていたのは、本当だよ」
「そうなのか？」
「自分で獲って、自分でさばいて、自分で片付けて……あれ、シンクも綺麗にしてたじゃん」
「けっこうなんとかなった」

　えっ、よかった、と佳乃は振り返り、公男の頬に手を当てた。
「やればなんとかなるんだね、ひとりでも、本当によかった。これからも何とかなりそうかな」
「これから？　これからって何だよ」
　佳乃が急に身を離して聞く。「ところで鹿肉は」
「冷凍、でも」公男はやっと、声を出す。
「でもなんで３週間も家を出て、山奥なんかに、マタギなんかにさ」
　それには答えず、佳乃が冷凍庫を開けた。「ねえ今夜、あの鹿食べたいな、料理頼める？」
「オマエが獲ったのか？」
「まさか」佳乃は笑って包みを出す。「解凍モード使える？　わかる？」
「じゃあどこで？」
「病院の横にジビエのお店があって、そこでエミちゃんに買って行ってもらったの」
　手渡された包みを胸に捧げ持ったまま、公男は固まっている。
「病院？」
　佳乃が続けた。
「入院してたんだ、手術も」
　公男はしばらく黙っていたが、ようやく、うそだろ？　とつぶやいた。
「まだまだ色々とかかるから、今のうちに慣れてもらったほうがいいかな、って」
「なんで相談してくれなかったんだよ」強い言い方になってから、急に声音がしぼむ。
「だって、夫婦だろ」
「分かってるでしょ？」責め口調ではなかったが、佳乃のことばに公男は身をすくめる。
「キミくんやさしいから、心配して病院にずっとついててくれる、って私も思ったよ。でもそれだけ、ついているだけで、何もかもやった気になっちゃう。それじゃあ今後、ずっと困っちゃうよね」
　公男はしばらく、包みを捧げ持ったままその場に佇んでいた。
「先にお風呂いい？」廊下の向こうから遠い声が響く。
「まだシャワーだけだから、すぐ出るけどさ」
　公男は頬に手を当てた。さっき、佳乃が触れた場所を。少しだけ濡れていた。
　公男は、大きく息を吸い込んでから、声を励ます。
「ステーキだろ？　楽勝だから」
　頼むね、と佳乃の声がバスルームに吸い込まれる。公男は、鹿肉に向かってひとり
「熊獲ってくるまで、俺もがんばるからさ」
　つぶやいてから、よっしゃ、と頬を叩いてレンジに真正面から向き合った。

〈了〉